

令和元年6月17日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01694

研究課題名（和文）スポーツコーチングにおける運動を「見抜く力」の養成に関する研究

研究課題名（英文）Phenomenological analysis of performance training ability of elite coach by observation in sports coaching

研究代表者

金谷 麻理子（kanaya, mariko）

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：00284927

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スポーツコーチングにおける熟練コーチの運動観察能力について、現象学的立場から分析することであった。その結果、熟練したコーチの運動観察能力は、単に外形的な運動経過の欠点や動きの結果を評価する能力ではなく、選手の動きの感じを把握する能力であり、選手の技能向上に直接役立つ指導方法の基礎となっているということが明らかになった。また、この能力はコーチ自身の経験によって形作られ、さらには、コーチと選手が運動観察によって得られる運動感覚と双方の関係性の時間的な制限を共有することが人間関係を構築する際に重要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかにされたスポーツコーチングにおける運動観察の構造、卓越した指導力を有すると判断された“職人”コーチの運動観察の内容および観点、その背景は、今後のスポーツ指導者を養成するプロセスにおいて重要な知見を提供するものとなった。特に、今回研究対象となった“職人”コーチの、現時点での観察観点の形成にはコーチ自身の現役時代や指導者となってからの「自主的に取り組んで、うまくいかなかった」経験が大きく関連していることが明らかにされたことは、今後指導者を目指す選手や指導者としてさらなる成長を目指す若手指導者にどのような経験を提供すべきなのかを考えるきっかけになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The present study analyzes phenomenologically the ability to observe the performance of elite coach in sports coaching. Results revealed that elite coach's ability to observe movement is not simply based on the ability to assess shortcomings of the physical movement process or results of movement, but rather an ability to understand the athlete's feeling of movement, and which is thought to directly help improve the athlete's skills. Research further clarified it a basis of the teaching method of an elite coach, and that this ability is also shaped by the coach's own experience. Additionally, the elite coach's observational analysis and time given for sharing the observed movement of athlete's movement sense with their athlete's is the basis for both athlete skill improvement and performance and establishing positive coach-athlete relationships.

研究分野：スポーツ運動学

キーワード：スポーツコーチング 運動観察 運動感覚 運動経験 スポーツ運動学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年のスポーツにおけるコーチングに関する研究は、目標とする運動の達成に必要な個々の要因、すなわち「技術力」や「体力」、「心的能力」など、主に自然科学における個別学問領域の立場からの研究が進められてきた。たとえば、生理学的な立場から競技者の身体特性を筋肉や細胞といった特定の部位、あるいは遺伝子レベルにまで遡って明らかにする、あるいは、スポーツバイオメカニクスの立場から、精密化された動作分析の方法によって人間の動きを客体化して選手の技術を解明するなどである。特にこの分野については、ビデオカメラのオートフォーカスや手ブレ補正、ハイスピード撮影、またそれらの映像に基づいて高度な分析を可能にするソフトなどが開発され、精密な分析が可能となった。さらには、インターネットの発展・普及によって、競技中に撮影した映像を離れた場所にいる選手やコーチがすぐに見ることができるようになり、スポーツの技能向上の現場は大きく変化している。つまり、これらの立場での研究は今日のスポーツ科学における中核的な領域であり、スポーツ界の発展のために多くの有益な情報を提示してきたといえる。

一方、これらの個別学問領域におけるほとんどの方法は、スポーツの多様な側面を客観的に数字に置き換えて評価することができる反面、特定の条件下で、かつ完了している側面のみを分析の対象とせざるを得ないという問題も含んでいる。映像情報や高度な分析によって導き出された数値は、完結した運動がどうであったかを示すことはできても、では実際にどうしたらできるのか、うまくなるのかについては、結局、選手が自分でどのように動くべきなのかという自身の運動感覚と向き合うことでしか知り得ないからである。つまり、スポーツの現場にどれほど科学技術が持ち込まれようと、運動を身につけるには実際にやってみなければならぬという現実があり、人間にはどんなに最先端の機器でも感知できない運動発生の芽を発見する能力というものがある。その能力のひとつに運動を“見抜く”力、いわゆる運動観察能力がある。

スポーツの指導者が選手の練習場面に立ち会うことは日常的によく見られる。スポーツの現場にどんなに ICT が導入されても、相も変わらず指導者と選手が直接会話を交わす場面は存在している。指導者は、日々の練習の中で刻々と変化する選手のコンディションを常に把握し、選手の技能向上を支えている。そこには客観的な分析によって得られる情報とは異なる、目に見えない情報がやり取りされているのあろう。

そして、このような人間独自の持つ能力について、分析しようとする領域に、ドイツ語圏のスポーツ科学における“Motorikforschung”(人間の運動に関する研究)や、我が国におけるスポーツ運動学がある。これらの分野では、「今まさに動きつつある」(金子、2002)という人間の主観情報に焦点を当て、運動・スポーツの構造を明らかにすることを目指している。この運動発生論的立場における運動・スポーツの分析は、「～することができる」という人間特有の運動学習に関わる能力の問題を取り扱っているため、スポーツの技能向上の現場において絶え間なくやってくる諸問題に立ちむかう選手やコーチに直接的に示唆を与えうるものであると考えられる。

しかしながら、スポーツ研究が自然科学的分析全盛の現代においては可視化することの難しい人間特有の能力の分析結果は研究成果として示しにくいものとして認識されている。このため、熟練したコーチが有する卓越した能力は一代限りで消え去ってしまう、あるいは直接指導に関わった一部の選手・アシスタントコーチにのみ経験として伝承される、という状況にあり、次世代の指導者育成に向けて十分な資料が整っているとは必ずしも言い難い状況にあるのではないかと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、スポーツを現象学的に分析しようとするスポーツ運動学の立場から、スポーツコーチングに必要であると考えられる指導者の運動を「見抜く力」に着目し、卓越した運動観察能力を有する“職人”コーチの能力を分析することによって、運動観察能力の養成プログラムの開発に役立てようとするものである。

3. 研究の方法

本研究では、まずスポーツにおける指導力の基礎となる、運動を「見抜く力」、すなわち運動観察能力の構造についてスポーツ運動学の立場から文献研究を行った。次に種目特性の異なる複数のスポーツ種目(剣道、サッカー、ダンス、バドミントン、ハンドボール等)において卓越した指導力を有すると判断された“職人”コーチの運動観察の内容とその背景について、実際の指導場面の観察とインタビューによって調査した。この場合、考察対象者は、教育機関に所属するスポーツ指導者で、かつ全国大会で複数回優勝または同等の成果をあげた者から選出した。

考察は以下の手順で行った。

- 1) 指導場面の観察とライフヒストリーを調査して、参考資料を作成
- 2) 上記資料にもとづいて半構造化面接の方法を用いてインタビュー
- 3) インタビュー結果を文章にまとめ、考察対象者本人によるインタビュー結果の確認
- 4) 上記資料に基づいて再度インタビュー
- 5) 調査結果に基づいて考察

なお、ここでは3)と4)を数回繰り返した対象者もいた。

4. 研究成果

本研究では、スポーツコーチングにおいて選手の技能向上に直接的に関与する情報を得る手段としての指導者の運動観察について検討した。その結果、この意味での運動観察は、心理学や脳科学、あるいはバイオメカニクスなどの自然科学的な立場における客観的な観察とは異なる、人間学的立場におけるいわゆる主観的な観察であるということが明らかになった。この場合、金子(2002)は、運動学習に関わる能力には、自身ができるようになるための創発能力と他者をできさせるようになるための促発能力があり、ここでの主題となる観察能力は促発能力のひとつであると述べている。また、この人間学的な運動学的観察は、マイネル(1981)の意味での運動観察であり、選手が自身の動きに伴う感覚を感じ取るという自己観察と、指導者が選手の動きを見て、選手が自己観察している動きの感じを想像するという他者観察があるという。そして、この他者観察によって生じる指導者と選手の間で生じる共感、スポーツコーチングの現場における伝え手と受け手の人間関係を構築する重要な基礎であることが明らかになった。つまり、選手の技能を向上させることができる、本研究における“職人”コーチは、この他者観察を通しての共感能力に優れており、それによって選手との深い信頼関係を構築できているということが推察された。

次に、考察対象者の“職人”コーチについては、以下のことが明らかになった。

練習場面における運動観察の内容については、各考察対象者から個々の選手の技術・戦術、あるいはチームの戦術に関する具体的な内容が語られたが、種目特性や指導方針、チームや選手個人のキャリアや技能レベル、長期的・短期的目標、その都度の心身のコンディションなど、多岐に渡る要因を踏まえた上での非常に個別性の高い内容であった。これらの詳細な分析結果については稿を改めて述べることにするが、いずれもどのような心構えで練習に取り組んでいるかという「練習に対する姿勢」と、練習の内容やそこで生じる現象についてどの程度理解しているかという「練習の意図の理解度」をも同時に感じ取っているということが明らかになった。このことは、指導者が選手の動きを見て感じていることが、単にその都度の動きの良さ悪しや成功・失敗あるいは欠点の有無ではなく、どの程度習得・習熟しているのか、選手本人がどの程度運動を理解しているのかも含めて観察しているということである。

次に、上記の内容の根拠となる「なぜそれを見ているのか」という運動観察の観点について分析した結果、今回選出された考察対象者はいずれも、選手が各スポーツの競技力向上を目指す中で継続的に自己成長させるための人間的な能力を身につけさせることを目的としているということが明らかになった。また、その背景には、コーチ自身の選手時代の経験ならびに現在の指導生活の体験から導き出された明確な指導理念が存在することが明らかになった。ただし、このことは考察対象者を選出する条件を、全国トップレベルの競技成績を有していると同時に、教育機関に所属していることとしたことも関連していると考えられる。しかしながら、この運動観察の観点の形成には、コーチ自身がそれまでに関わった指導者や、その指導者から学んだ内容、競技環境、所属チームの方針などが大きく影響しているということも明らかになり、特に「自主性を重んじる環境」や「自らの思い通りにならない体験」がキーワードとして抽出されたことは大変興味深い結果であった。このことは今後の指導者養成プログラムを検討する際にカギとなる知見であると考えられる。

さらに、全体を通して、コーチはその都度の選手の状態だけを見ているのではないことも明らかになった。指導する選手のそれまでの競技生活での経験や環境、そしてその後の競技生活全般を通して達成しようとしている目標などを踏まえた上で、コーチが目指す選手としての技能向上と人間的な成長の、それぞれの目標を達成するために「今」「ここで」は選手にどのような能力を身につけさせるべきなのかということ念頭において動きを観察し、それに基づいて指導を行っているということであった。つまりこのことは、コーチと選手の間、伝え手と受け手の関係には時間的な制限があるということも意味している。いかに優秀な“職人”コーチであっても、選手との関係は無期限ではない。いつまでに選手の何をどうしたいのか、どうしなければならぬのか、という時間的な切迫感もまた選手との深い人間関係を構築するひとつの要因となっていると考えられる。

これらのことから、高度な指導力を有するスポーツ指導者の運動観察能力は、単に外形的な運動経過の欠点や、動きの結果を評価する能力ではなく、選手が感じていると思われる感覚を把握する能力であり、選手の技能向上を直接導く有効な指導の基礎となると考えられる。またこの能力は、コーチ自身のそれまでの経験によって形作られ、この能力によって得られる運動感覚と時間的な制限を選手と共有することが選手との人間関係を構築する基礎となっているのである。今後は、ここで得られた結果に基づいて、各スポーツ種目における個別の運動観察内容についてのさらなる検討と、指導者養成のための運動観察能力養成プログラムの開発に取り組んでいく必要があると考えられる。

なお、本研究の成果は、以下の発表論文ならびに学会発表における中核的な理論的基礎として公表された。これらの研究における運動学習における「運動観察」は本研究におけるスポーツコーチングにおける「運動観察」と同様の意味であり、この能力はスポーツ技術の習得・習熟に関わる指導者、学習者には不可欠な能力なのである。

<文献>

金子明友(2002) わざの伝承、明和出版

マイネル・クルト(金子明友訳)(1981) スポーツ運動学、大修館書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

金谷麻理子、高木英樹：大学体育における意識的運動学習の教育的価値に関する一考察．大学体育スポーツ学研究、16：3-12頁、2019（査読あり）

〔学会発表〕(計 1件)

Mariko Kanaya: Review of the subject content in university physical education: From the viewpoint of the phenomenological-morphological movement theory in sport、International Association for the Philosophy of Sport Conference、Oslo、Norway、2018.9

〔その他〕

ホームページ等

www.taiiku.tsukuba.ac.jp

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。